

今世紀最高最大のスケールで描く真珠湾攻撃の全貌!

70mm

パナビジョン ■ デラックスカラー  
■ 超ステレオ音響 ■

太陽は昇った—昭和16年12月8日—  
その真紅の朝焼けは、血と炎のドラマに  
ふさわしく大空をそめた—

# トトトト テテテ

TORAI TORAI TORAI!

総指揮 ダリル・F・ザナック  
製作 エルモ・ウィリアムス  
監督 リチャード・フライシャー  
脚本 外田利雄 / 深作欣二  
撮影 チャールズ・ホイラー  
音楽 ジェリー・ゴールドミス  
原作 ゴードン・W・アラング  
「イラトトラ」(リーダーズ・ダイジェスト刊)



〈近衛文相〉 千田是也  
〈南雲忠一〉 東野英治郎  
〈堀田 光〉 三橋達也  
〈須田三津雄〉 田村高広  
〈山本五十六〉 山村 聡



〈キングス海軍大尉〉(スチムソン) 陸軍長官(ブラットン中佐) (ハルジー司令官) 〈ショート将軍〉  
M・バルサム J・コットン E・G・マーマー ジャック・ホワイトモア J・ロバース

山 村 聡  
三 橋 達 也  
田 村 高 広  
東 野 英 治 郎  
千 田 是 也  
他 日 米 オールスター

マーチン・バルサム  
ジョセフ・コットン  
E・G・マーシャル  
ジェームス・ホイットモア  
ジェイソン・ロバース

12月25(金)日大公開

スーパー・シネラマ  
方式上映  
シネラマ  
超ステレオ音響

全階指定席入替制

テアトル東京  
(561) 8891~3

DI50  
超ステレオ音響

入替ナシ / 毎土曜オールナイト

新宿 プラザ劇場  
(200) 9141

20  
FOX映画

製作総指揮……………ダリル・F・ザナック  
 監督……………エルモ・ウィリアムス  
 監督……………リチャード・フライシャー  
 監督……………舛田利雄  
 監督……………深作欣二  
 音楽……………ジェリー・ゴールドスミス  
 本音……………ラリー・フォレスト  
 脚本……………小国英雄  
 本脚……………菊島隆三  
 日米オールスター・キャスト競演

# トラ・トラ・トラ!

70mm  
 パナビジョン  
 デラックスカラー  
 超ステレオ音響



「トラ・トラ・トラ!」製作に関しては、過去五箇年間、日米映画界の間に、大きな懐疑が残されていた。しかし、68年の夏を迎えるまでに、ようやく両国政府も、この歴史上ドラマチカルな色々な事件や感激のひとつときひとつときをもう一度語ってもよいという態度を示し始めた。

日米は、もはや互に敵ではなく、むしろ不安な世界における協力者である。両国は、今こそ、このモニユメンタルな物語を発表すべきで、これが将来への偉大な歴史的意義を包含しているという点で一致を見たのである。

これについては多分、真珠湾奇襲を計画した日本海軍の戦略家源田実がもっとも適切な意見を述べているであろう。曰く「私の戦後、国民が歴史をありのままに扱う理知と理解のレベルに到達したことを望む」。

かくて、日米映画産業は何箇月もの間交渉を重ねた結果、遂に他にさきをかけて、最も偉大で、また他に類例のない作品を合作する運びとなった。

フィルムは別々に撮影された。日本側が日本のスタッフとキャストで作ったフィルムと、アメリカ側がアメリカのスタッフとキャストで作ったフィルムとを編集して一本にしたのである。

最初、両国の製作陣は、この試みを疑惑の念をもって見た。一つの物語を別々の国の会社と製作法と器材装備が違ふこと、こうした場合に直面することになったからである。

だが、いつものことながらのことが製作上の色々な問題は、結局映画の題材によって解決されてしまふ。両者の一致する点は、フィルムであった。フィルムを撮影するという共通の努力であった。そして案の定、「トラ・トラ・トラ!」製作における日米間の創作上のコミュニケーションの問題は、両国がそれぞれ受け持った総数六六一のシーンを撮影することで解決した。

京都と最初はハワイ、後にハリウッドとの無電連絡によって両プロダクション・ユニオンは固く結びついた。アメリカの渉外部から毎日のように両方に共同製作に必要な情報が送られた。しばしば日本の衣裳がハワイやカリフォルニアに、またパナビジョンの器材が日本に空輸された。芦屋で撮影されたフィルムは大阪に空輸され、京都で現像したものが日本航空やパン・アメリカンでハリウッドに空輸された。

この映画と取り組んだ人々にとり、映画史上初めての仕事であった。結局、不可能を可能とする仕事であったのだ。

**「トラ・トラ・トラ!」話題の総決算!**

新しい夜明けを迎えたアメリカ映画が、その実績と自信を持って今世紀最高最大のスケールで製作したのが、このマンモス・スペクタクル超大作「トラ・トラ・トラ!」である。

日米開戦の火ぶたを切った真珠湾奇襲大作戦の全貌を描く「トラ・トラ・トラ!」とは奇襲一番乗り、の渾身田村高広(田村高広)が連合艦隊旗艦赤城へ送った「われ真珠湾攻撃成功せり」の暗号無電である。

メリランド大学歴史学教授ゴードン・W・ブランゲ博士が、戦後20年間、日米双方から取材した莫大なる資料をもとに真珠湾奇襲のすべてを再現した戦史である。勝利の記録でも敗北の記録でもない。二つの国の誤解の記録であり、優秀な能力と偉大なエネルギーの浪費の記録である。そして戦争の中の人間性を描いたものである。

製作総指揮ダリル・F・ザナック(史上最大の作戦)、製作エルモ・ウィリアムス(製作費三千三百万ドル(一億八千万円)の超大作で、製作期間が二年、準備期間を入れれば、まる五年掛かり

で、出演者も日本側一五五名で、東宝、日活、東映、歌舞伎、新劇、能楽、TVその他各方面からタレントが集められた。アメリカ側の出演者は一六四名、日米合わせて三〇〇名を超す。日本同様、製作合理化が行われている世界映画界では、ここ当分はこれほど大規模な作品は作れないと言われている。

●製作のスタートは、66年10月、「トラ・トラ・トラ!」の映画化権を85万ドル(約三億円)で獲得。FOXのD・F・ザナック社長が日本側監督に黒沢明を指名したことから始まった。時を移さず、プロデューサーに「史上最大の作戦」で起用したエルモ・ウィリアムスを決める。12月3日、黒沢監督は指名を受諾。67年1月10日から菊島隆三、小国英雄らと共に熱海でシナリオ執筆を開始。5月アメリカ側監督に「ミクロの決死圏」のリチャード・フライシャーが決定、7月には黒沢組を含めてハワイで最高スタッフ会議が開かれる。

●27稿を重さねた日本側脚本と同時に一年半で23回推敲したアメリカ側脚本完成。しかし12月10日に「脚本と撮影(実物を使う)」に万全を期す為68年秋まで撮影開始を延期する」と発表があったのは68年7月。この作品の主人公をほぼ80%は既成俳優を使わず一般から公募するという正式発表は日本側製作担当会社「黒沢プロ」からあったからだ。あとを追うように東京・赤坂の表通りのビルの上に縦9メートル、横25メートルの巨大な「トラ」の看板が出現。道行く人々をびくつかせた。

●真夏のうだる暑さの7月下旬。九州芦屋に「長門」「赤城」など三億円もかけた大がかりなオアゾン・セットが工事にかかる。時、同じくアメリカ側で使用する「アリゾナ」「ネバダ」他15種の戦艦の実物大、寺、寺、寺のセット建造を開始する。費用はじめて14億円になる。九月一日にはアメリカで特撮部分から撮影がはじまり、エンジニアは動いた。

●十月上旬、日本側で使うゼロ戦他の航空機30機の改造製作を開始。下旬にはアメリカ側で真珠湾ロケの為に使用する日本軍主力航空機、ゼロ戦を含む97機が完成。アメリカの航空機も国防省の協力で現存するものを改造、また新しく作った10機を含めて33機が揃った。

●11月10日、アマチュアばかりの日本側主要キャストの発表に世間は、アッ、と驚く。いよいよカメラは12月3日に廻りはじめた。舞台はワシントンの日本大使館のシーン。あいかわらずきびしい表情の針は止った。日本映画史上最大のトラの連続が始まるが、この真相はまだに明らかでない。

●代役が大変だった。二転、三転し、年が明けた69年2月17日になってようやく日活外田監督と東映深作監督の共同演出が決まる。3月1日、山村聡が山本五十六になったのは、アマチュア俳優が全員プロに切り替って三日から芦屋で撮影再開。悪天候にもかかわらずカメラはスムーズに回って5月12日には日本側がアッ、6月29日にはアメリカ側も終了した。

●この間、ザナック社長が黒沢明監督宛に打った長文の電報(黒沢再起用を示唆したもの)を青柳プロデューサーがかくしたという「発表」が黒沢側からあったり、三船敏郎の奇々怪々の行動が目についた。

●完成後のトラの火のともつばらアメリカの下院。ジョン・マクフィー議員が「政府の軍人や財産を一企業に使われたのはけしからん(69年6月14日)同じく「米史上最悪の敗戦を全米で見せつけられるのは困るから上映を禁止せよ(70年2月18日)」などとゴタゴタがあった。

●公開日も当初から三回変更し、やっと9月25日公開の運びとなった。太平洋をマタにかけて「これほどめづらしい映画も史上初めて。画最後の戦争映画超大作として偉大な足跡を残す事になった。